

みんなで放送コンテスト2020

#みんコン

#うちで過ごそう

アナウンス部門・朗読部門

決勝審査 提出原稿

アナウンス部門

《課題原稿》

以下の文章を「100 字以内に要約したもの」を読むこと

1 学期のはじめに、ちょっと変わった体育の授業が行われています。^{い が ら し}五十嵐

^{ゆ う こ}裕子 先生の、美しい立ち方と笑顔を身につける授業です。

授業は、肩甲骨周りのストレッチから始まります。次につま先立ちをして、ゆっくりかかとをおろします。最後に、口のはしを上げれば完成です。この一連の動きで、猫背、下半身の傾き、顔のたるみが改善されます。生徒たちは「鏡を見て驚いた。自分に自信が付いた」と笑顔で話しています。

授業を受けた生徒は、いまインターンを受け入れた企業でも注目されています。「笑顔が明るかった」「姿勢がよくやる気を感じた」という声が多くあがっているんです。五十嵐先生は「立ち居振る舞いがよければ、相手も気持ちがよくなります。自分も周りも前向きになれる、そのきっかけが姿勢と表情なんです。」と話していました。

自分を輝かせるには、姿勢と表情から。背筋を伸ばしてにっこり笑えば、見える世界が変わってくるかもしれません。

発表順	1	原稿種類	自作原稿
エントリーNo	48	ニックネーム	みやだ:富山高等学校

《自作原稿／OB・OG 原稿》

オリンピックを目指し、毎日練習に励む小さな水泳選手を紹介します。小学 5 年生のアイリちゃんです。アイリちゃんは 6 歳の時から水泳を習い始めました。そしてわずか 3 年間で選手コースの推薦をもらいました。

今年の春、辛い練習の積みかさねが実を結び見事目標タイムを達成しました。しかし、新型コロナウイルスによって練習や、出場できるはずだった試合が中止になりました。アイリちゃんはこの時、今までの練習が無駄だったのではないかと悩んだと言います。そんな時、「今できること、自分がやるべきことをしなさい。」というお父さんの言葉で、家でのトレーニングに励むことを決意しました。

アイリちゃんは、「立ち止まっても何も始まらなかった。あの時間を上手に使って良かった。」と話しています。現在は通常の練習も再開し、次の目標に向かっていきます。

この小さな水泳選手の大きな行動力は、私達に動き出す力と勇気を与えてくれます。

《課題原稿》

五十嵐裕子先生は、美しい立ち方と笑顔を身につける体育の授業を行なっています。姿勢と表情で自分も周りも前向きになれると話す裕子先生。授業を受けた生徒は自分に自信がつき、インターン先でも注目されています。

(大会が提示した文章を 100 字以内に要約)

発表順	2	原稿種類	OB・OG 原稿 No.11
エントリーNo	88	ニックネーム	ありさ

《自作原稿／OB・OG 原稿》

⑪

福井赤十字病院の緩和ケア病棟で、落語会が開かれました。

出演したのは、アマチュア落語家の鳴尾健（なるおたけし）さんです。

鳴尾さんは福井市のラジオ局で働きながら、月に一度、落語会を開いています。そんな鳴尾さんのもとに「末期がんの患者さんのために落語をしてほしい」と病院から依頼が来ました。鳴尾さんはすぐに引き受けたものの「毎日死と向き合っている人たちが自分の落語で笑ってくれるのか」と不安が大きくなりました。

迎えた本番、鳴尾さんは「天狗さばき」というネタを披露し、7人のキャラクターを見事に演じ分けました。会場に集まったおよそ20人の患者さんからは、何度も笑いが起きました。中には「久しぶりに笑うことが出来た」と嬉し涙を浮かべている人もいました。鳴尾さんは「笑ってもらえたけれど、ネタの最中も自分の心配ばかりしてしまった。もっと経験を積んでみんなに楽しんでもらえる落語をしたい」と話していました。

聞き手の心に寄り添う語り手になるため、鳴尾さんの稽古は続きます。

《課題原稿》

美しい姿勢と笑顔を身につける授業が行われました。生徒からは身体が改善させて自信がついたと好評です。先生は「前向きになれるきっかけになれば」と話します。自分磨きで世界が少し明るくなるかもしれません。

（大会が提示した文章を 100 字以内に要約）

発表順	3	原稿種類	自作原稿
エントリーNo	161	ニックネーム	米田菜茅

《自作原稿／OB・OG 原稿》

十一月、二年生が修学旅行へ向かいます。初日に訪問する広島県では、原爆ドームや平和記念資料館の見学、被爆者講和を行う予定です。この修学旅行に際して、広島に千羽鶴を届けようと声を上げた生徒がいます。二年一組の錦千里さんです。錦さんはかつて広島を訪れた時、世界中から贈られた千羽鶴に感銘を受けたといいます。そして北高生が平和について考えるきっかけになればとこのプロジェクトを立ち上げました。

錦さんは、「はじめはみんなの賛成が得られるか不安でしたが、多くの人の協力ですでに二千羽の鶴が集まりました。北高生の思いを、大切に広島へ届けたいです」と話してくれました。

錦さんの新たな目標は、修学旅行までに一万羽の鶴を集めること。みなさんも平和への思いを折り鶴に託してみませんか。

《課題原稿》

五十嵐裕子先生による美しい立ち方と笑顔の授業が行われています。授業を受けた生徒は自分に自信を持てたと言い、また、インターンの受け入れ先でも注目されているんです。姿勢と表情はあなたを輝かせてくれます。

(大会が提示した文章を 100 字以内に要約)

発表順	4	原稿種類	自作原稿
エントリーNo	19	ニックネーム	小鷹織世

《自作原稿／OB・OG 原稿》

白山高校に、ダンディーな書道の先生がいます。

それは、寺岡稔先生です。先生は書道部の顧問を務めており、部員を 4 年連続総合文化祭の優秀な賞に導いています。

先生が書道を始めたきっかけは、小学生の頃、周りのほとんどの子が習い事で書道をしており、先生の家庭でもその流れに乗って始めたそうです。今となっては、人生において欠かせない存在で、自分の思い描いたイメージ通りに動きを表現できることにやりがいを感じるそうです。

寺岡先生は

「書道はスポーツと違い、納得のいく作品ができるまで何度も練習ができます。努力すればするほど必ず上手くなるもので、努力は決して裏切りません。」と、語ります。

書道は、日本の文化であり芸術、寺岡先生は今日も己を磨きます。

《課題原稿》

五十嵐先生の少し変わった体育の授業が行われました。

美しい立ち方と笑顔を身につける授業です。生徒たちは、鏡を見て驚きの声をあげていました。先生は「前向きになるきっかけが姿勢と表情なんです。」と話します。

(大会が提示した文章を 100 字以内に要約)

発表順	5	原稿種類	自作原稿
エントリーNo	45	ニックネーム	佐藤 倫香

《自作原稿／OB・OG 原稿》

クラシック音楽を通して、音楽の素晴らしさを伝える大学生、山本杏樹さんを紹介します。

山本さんは、東京藝術大学ピアノ科の二年生です。山本さんがピアノに出会ったのは四歳の時。当時習っていたエレクトーンと同じ、鍵盤楽器であるピアノに惹かれたのがきっかけです。元々、感情を言葉で表現するのが苦手だったという山本さんですが、様々な曲を弾いていく中で、ピアノを通してなら自分の思いを素直に表現できると気づいたそうです。その豊かな表現力を生かして、数々のコンクールで入賞し、高校二年生の時にはオーケストラとの共演も果たしました。

そんな山本さんが大切にしていることは、美しいと感じたものを演奏を通して人々と共有すること。山本さんは、「大好きなクラシック音楽を演奏することで、曲の素晴らしさを聞いている人々と体感したい。」と語ります。

今後も、様々な演奏活動を通して、音楽の素晴らしさを奏でていきます。

《課題原稿》

体育の五十嵐先生による美しい姿勢と笑顔を身につける授業が話題になっています。やり方は肩甲骨周りと足のストレッチの後に口角を上げるだけ。授業を受けた生徒は明るく前向きになり、自分に自信がついたようです。

(大会が提示した文章を 100 字以内に要約)

発表順	6	原稿種類	自作原稿
エントリーNo	24	ニックネーム	永礼もも香

《自作原稿／OB・OG 原稿》

人生をかけた 3500 枚のプリントが生徒を圧倒します。世界史の高橋雄幸先生は今年で 61 歳です。味のある渋い声が教室に響きます。先生がつくる「雄幸プリント」には手書きの文字とイラストがびっしり。リンカーンの髭や皺、クレオパトラの髪の質感など、忠実に再現されています。始まりは今から 36 年前。特技の美術を生かしてマルコ・ポーロを描きました。歴史をリアルに感じてほしい。絵の腕前を磨き続け、今では一人一人に毎年 1000 枚が配られます。2 年生の田中真理子さんは、「豆知識と迫力あるイラストでわかりやすいです。でもファイルが重すぎて肩が凝ります」と苦笑い。夏休みは印刷室に籠り、一年分のプリントを山積みになります。先生は、「プリントはいつでも記憶から取り出せます。いつか海外を旅したときに、このイラストを思い出してくれたら嬉しいな」と笑います。よりリアルな授業を目指して。雄幸プリントは進化を続けます。

《課題原稿》

五十嵐裕子先生の授業では美しい立ち方と笑顔について学びます。生徒たちはインターネットでも注目され、「自分に自信が付いた」と笑顔です。先生は「前向きになれるきっかけが姿勢と表情なんです」と話していました。

(大会が提示した文章を 100 字以内に要約)

発表順	7	原稿種類	OB・OG 原稿 No.19
エントリーNo	198	ニックネーム	桜井美月

《自作原稿／OB・OG 原稿》

①9

私たちの学校生活をパンで応援するマキノベーカリーの話です。

ベーカリーを経営するのは、三十四年前に本校を卒業した牧野直司（まきのなおじ）さんとその家族です。四十種類以上のパンを全て百円で販売しています。四月から消費税率が八％になり、原材料も値上がりしましたが、価格は変わっていません。牧野さんがパンを値上げしなかったのは生徒にエールを送りたいという気持ちがあったからです。その想いは、部活動を必死に取り組む生徒達を正門前のお店から見守っているうちに次第に強くなっていきました。そして、赤字覚悟で百円のまま販売することを決めたのです。

牧野さんは「美味しいと言ってくれる言葉が一番の利益。消費税率が十％になってもできるだけ安く売りたい。」と話しています。

牧野さんの想いが詰まったパンは私達の心も満たしてくれます。

《課題原稿》

体育科の五十嵐裕子先生は、美しい立ち方と笑顔を身につける授業を行なっています。生徒からは自分に自信が付くと好評です。立ち居振る舞いで自分も周りも気持ち良くなる。姿勢と表情で自分を輝かせてみませんか。

（大会が提示した文章を 100 字以内に要約）

発表順	8	原稿種類	自作原稿
エントリーNo	65	ニックネーム	ベル

《自作原稿／OB・OG 原稿》

新型コロナウイルスで無くなってしまった本来の部活道。今日は仲間と会えない状況下でも、部活道を諦めない高校生を紹介します。尼崎市立尼崎高校女子バスケットボール部の一年生、田中歩希さんです。10 歳からバスケットボールを始め、兵庫県選抜も経験している歩希さん。高校でも厳しい環境でバスケットがしたいと、名門である市立尼崎高校を選びました。しかし 4 月からの休校で部活には参加できていません。そこで一年生同士で映像を繋ぎ、オンライントレーニングを始めました。体幹や筋トレ、ダンスなど、市尼式トレーニングを早く覚えられるようにと、朝 6 時半と夜 9 時に行っています。歩希さんは「一人では毎日なんて続かないと思う。みんなで頑張ってレギュラーを狙いたい。」と話していました。そして、この歩希さん、実は私の妹なんです。自粛期間だから見ることのできた家族の努力。妹を含めた一年生達の今後の活躍に期待が高まります。

《課題原稿》

五十嵐裕子先生の体育では美しい立ち方と笑顔を身につけることができます。この授業で猫背や顔のたるみが改善され、前向きになった生徒もいるそうです。好印象を持たれる姿勢と表情であなたの世界を変えませんか。

(大会が提示した文章を 100 字以内に要約)

発表順	9	原稿種類	自作原稿
エントリーNo	61	ニックネーム	飯田乃希亜

《自作原稿／OB・OG 原稿》

北信越インターハイまで、あと1年となりました。今日は、インターハイの高校生活動委員を務める塩田実久さんを紹介します。

塩田さんはこれまで、活動委員として、地元のスポーツイベントで大会のPRをしてきました。今は、来年7月の総合開会式で行うパフォーマンスについて考えています。選手のモチベーションを上げるために、演出に工夫を凝らしたダンスを披露するつもりです。

塩田さんが活動委員になったのは、中学校のバレー部での経験があったからです。レギュラーだった塩田さんにとって、試合に出られなくても、自分を支えてくれる仲間たちの存在は、とても大きなものでした。

塩田さんは、「私がバレーを頑張れたのは、仲間たちの応援があったからです。だから今度は自分が選手を応援したいと思ったんです。」と話していました。

活動委員としての活動は、新型コロナの影響で、しばらく止まっていましたが、9月から再開することになりました。来年の夏のインターハイで、塩田さんたちがどんなパフォーマンスを見せてくれるのか、期待しましょう。

《課題原稿》

体育科の五十嵐先生は、美しい立ち方と笑顔を身につける授業をしています。生徒たちは、「鏡を見て驚いた。自分に自信がついた」と喜んでいます。生徒たちの姿勢の良さと笑顔は、インターン先の企業でも評判です。

(大会が提示した文章を 100 字以内に要約)

発表順	10	原稿種類	OB・OG 原稿 No.19
エントリーNo	38	ニックネーム	抹茶アイス

《自作原稿／OB・OG 原稿》

①9

私たちの学校生活をパンで応援するマキノベーカリーの話です。

ベーカリーを経営するのは、三十四年前に本校を卒業した牧野直司（まきのなおじ）さんとその家族です。四十種類以上のパンを全て百円で販売しています。四月から消費税率が八%になり、原材料も値上がりしましたが、価格は変わっていません。牧野さんがパンを値上げしなかったのは生徒にエールを送りたいという気持ちがあったからです。その想いは、部活動を必死に取り組む生徒達を正門前のお店から見守っているうちに次第に強くなっていきました。そして、赤字覚悟で百円のまま販売することを決めたのです。

牧野さんは「美味しいと言ってくれる言葉が一番の利益。消費税率が十%になってもできるだけ安く売りたい。」と話しています。

牧野さんの想いが詰まったパンは私達の心も満たしてくれます。

《課題原稿》

五十嵐先生のユニークな体育授業。美しい姿勢と笑顔が身につきます。授業を受けて自信がついた生徒は、その立ち居振る舞いから周りをも前向きにしインターン先の企業でも注目されています。輝く自分に一歩前進です。

（大会が提示した文章を 100 字以内に要約）

朗読部門

《課題原稿》

以下の文章をそのまま読むこと

梶井基次郎 作「愛撫」

夫人は微笑とともに振り向いた。そしてそれを私の方へ抛って寄来した。取りあげて見ると、やはり猫の手なのである。

「いったい、これ、どうしたの!」

訊きながら私は、今日はいつもの仔猫がいないことや、その前足がどうやらその猫のものらしいことを、閃光のように了解した。

「わかっているじゃないの。これはミュルの前足よ」

彼女の答えは平然としていた。

出典:<https://www.aozora.gr.jp/cards/000074/card411.html>

発表順	1		
エントリーNo	50	ニックネーム	たにかわ:富山高等学校
題名	葉桜と魔笛		
著者	太宰治		

余命宣告された妹をもつ主人公はある日、妹のタンスの手紙を盗み見て、妹が男性と付き合っていたこと、病気のせいで別れを告げられたことを知る。妹を不憫に思った主人公は男性になりすまして妹宛に「貴方を思って毎日 6 時に軍艦マアチを吹きます」と手紙を綴った。しかし、妹に手紙を渡すと、「姉さんが書いたのね」と見破られてしまった。そして妹は、青春を送りたい一心で自分宛に手紙を出していたことを打ち明けた。

姉さん、あたしたち間違っていた。お伶俐

すぎた。ああ、死ぬなんて、いやだ。あたしの手が、指先が、髪が、可哀そう。死ぬなんて、いやだ。いやだ。」

私は、かなしいやら、こわいやら、うれしいやら、はずかしいやら、胸が一ぱいになり、わからなくなってしまうして、妹の痩せた頬に、私の頬をぴったり押しつけ、ただもう涙が出て来て、そっと妹を抱いてあげました。そのとき、ああ、聞えるのです。低く幽かに、でも、たしかに、軍艦マアチの口笛でございます。妹も、耳をすましました。ああ、時計を見ると六時なのです。私たち、言い知れぬ恐怖に、強く強く抱き合ったまま、身じろぎもせず、そのお庭の葉桜の奥から聞えて来る不思議なマアチに耳をすまして居りました。

神さまは、在る。きっと、いる。私は、それを信じました。妹は、それから三日目に死にました。医者は、首をかしげておりました。あまりに静かに、早く息をひきとったからでございましょう。けれども、私は、そのとき驚かなかった。何もかも神さまの、おぼしめしと信じていました。

発表順	2		
エントリーNo	131	ニックネーム	織田晴香
題名	みれん		
著者	シュニッツェルアルツール		

病気を患い余命一年と宣告された男と、彼の傍に付き添う女の物語。男は近づく死の恐怖から情緒が不安定になり、女に酷い態度をとるようになる。女は最初、男とともに死ぬと決めていたが、だんだん恐ろしくなってしまう。二人の心情がすれ違っていく中で、男は女に俺と一緒に死んでくれと懇願するようになる。

病人は平生の力を悉く恢復し得たように、しっかり女の頭を抑えて放さない。「己と一しょに死んでくれる約束じゃないか」と、忙しい語調で云って、女の顔の側へびったり顔を寄せた。病人の息が女の口に障る。

女は顔を引こうとしても引かれない。

病人は自分の詞を一句一句女の口に注込むように言うのである。「己は一人で行くのは厭だから、お前を連れて行くよ。己はこんなにお前を愛しているのだから、お前を手放して置く事は出来ない。」

女は恐ろしさに麻痺したようになっている。その咽からは自分にもほとんど聞えない位な、咳嘎れた叫び声が出た。こめかみと頬とをしっかりと抑えられていて、頭を動かす事が出来ない。

病人は頻りに口説き立てる。湿っぽい、熱い息が女の顔に触れる。「一しょだ。一しょだ。お前の意志でそう極めたのじゃないか。一人ではこわくて死なれない。一しょに死んでくれるかい。」

女は足で自分の椅子を押し退のけた。そして鉄の箍を脱ずすように、自分の頭を病人の手から引き放した。

病人は女の顔を挟んでいた手を、そのままにしている。丁度まだ女の頭が間に挟まっているように、空を掴つかんでいるのである。そして女の頭が抜け出したのが、まだ分からないかと思われるような顔をして目を据えている。

発表順	3		
エントリーNo	32	ニックネーム	奈良慶子
題名	手袋を買いに		
著者	新美南吉		

子狐が雪で遊んだので手が冷たくなったのを見た母狐が町に手袋を買いに行こうとする。だが、母狐は以前町の百姓に追いかけられたので怖くて行くことができず子狐だけが買いに行くことになる。母狐は子狐の片手を人間の手に変える。子狐は間違えて狐の手の方を出してしまったが手袋を買うことができた。洞穴に帰ってきた子狐は母狐に、間違った方の手を出してしまったが手袋を買えたので人間は怖いものではないことを教えた。

子狐は教えられた通り、トントンと戸を叩きました。

「今晚は」

すると、中では何かことごと音がしていましたがやがて、戸が一寸ほどゴロリとあいて、光の帯が道の白い雪の上に長く伸びました。

子狐はその光がまばゆかったので、めんくらって、まちがった方の手を、——お母さまが出しちゃいけないと言ってよく聞かせた方の手をすきまからさしこんでしまいました。

「このお手々にちょうどいい手袋下さい」

すると帽子屋さんは、おやおやと思いました。狐の手です。狐の手が手袋をくれと言うのです。これはきっと木の葉で買いに来たんだなと思いました。そこで、「先にお金を下さい」と言いました。子狐はすなおに、握って来た白銅貨を二つ帽子屋さんに渡しました。帽子屋さんはそれを人差指のさきにのっけて、カチ合せて見ると、チンチンとよい音がしましたので、これは木の葉じゃない、ほんとお金だと思いましたので、棚から子供用の毛糸の手袋をとり出して来て子狐の手に持たせてやりました。子狐は、お礼を言ってまた、もと来た道を帰り始めました。

発表順	4		
エントリーNo	180	ニックネーム	松本萌花
題名	高校入試		
著者	湊かなえ		

県下有数の県立橘第一高等学校(通称一高)を受験する芝田麻美は県議の父を持つ。母は過保護でありながら娘の気持ちを理解していない。麻美はかつて友人たちが自分より先に携帯を持ち、自分だけ買い物に誘われなかったことがある。麻美は自分の心の内を表現するのが苦手で、母にも友達にも上手く自分の気持ちを言えないでいる。

朝、登校すると、みんなは隣町のショッピングセンター内に新しくできたスイーツ店の話をしていた。ミルクレープおいしかったね、とか、今度はジェラートも食べてみたくない？とか。ほんの二、三日前の昼休みに、みんなで行ってみたいと言っていたお店だ。そのときにはあたしもいて、絶対行こうねって約束したのに。

一昨日、みんなでどこか行ったの？

全然気にしていないふうに訊ねたのに、みんな、しまった、って顔をして、そこに行くことになったいきさつを話してくれた。ショッピングセンターにはこの辺りで一番大きな書店が入っている。そこに入試の参考書を買に行き、ついでにスイーツ店にも寄ってみただけだと。

一あたしも、行きたかったな。

これも明るく言ってみた。

一麻美は一高受けるんでしょ。あたしたちのレベルに合わせてたら、麻美のためになんないって、こっちだって気を遣ってんだからね。

そんな気遣い、別にいらないのに。だけど、こういうのが本当の友情だと言われると、あたしは、ありがと、と答えるしかなかった。

発表順	5		
エントリーNo	66	ニックネーム	パルナ
題名	斜陽		
著者	太宰治		

戦後、貴族である主人公のかず子一家は次第に没落していきます。父の死、弱りゆく母、荒廃する弟の間でかず子は家族のある男性に恋をします。誰にも相談できず、母と弟を支えなければならない立場から「幸福」について考えるようになりました。幸福というものを、決して晴れやかで華やかなものとして捉えていないかず子の心情や、母の病死、弟の自殺を乗り越え、幸福に生きていこうとする姿勢が描かれた作品です。

お母さまは、淋しそうにお笑いになった。それから、しばらくして、
「泣きたくても、もう、涙が出なくなったのよ」
とおっしゃった。

私は、お母さまはいま幸福なのではないかしら、とふと思った。幸福感というものは、悲哀の川の底に沈んで、幽かに光っている砂金のようなものではなかろうか。悲しみの限りを通り過ぎて、不思議な薄明りの気持、あれが幸福感というものならば、陛下も、お母さまも、それから私も、たしかにいま、幸福なのである。静かな、秋の午前。日ざしの柔らかな、秋の庭。私は、編物をやめて、胸の高さに光っている海を眺め、

「お母さま。私いままで、ずいぶん世間知らずだったのね」

と言い、それから、もっと言いたい事があったけれども、お座敷の隅で静脈注射の支度などしている看護婦さんに聞かれるのが恥ずかしくて、言うのをやめた。

発表順	6		
エントリーNo	16	ニックネーム	伊藤心晴
題名	銀河鉄道の夜		
著者	宮沢賢治		

丘で星空を眺めていたジョバンニは、いつのまにか銀河鉄道に乗っていました。そしてそこには、友人のカムパネルラもいました。銀河鉄道に途中で乗車した女の子のことを、ジョバンニは気になりました。しかしその女の子と、一緒にいた青年たちは「天上へ行く」と言っていなくなってしまいました。ジョバンニは、なんだか寂しくなりました。その時です。突然すうっと霧がはれかかりました。

そのときすうっと霧がはれかかりました。どこかへいく街道らしく小さな電燈の一系列についた通りがありました。それはしばらく線路に沿って進んでいました。そして二人がそのあかしの前を通って行くときはその小さな豆いろの火はちょうど挨拶でもするようにぽかっと消え二人が過ぎて行くときまた点くのでした。ふりかえって見るとさっきの十字架はすっかり小さくなってしまいほんとうにもうそのまま胸にも吊されそうになり、さっきの女の子や青年たちがその前の白い渚にまだひざまずいているのかそれともどこか方角もわからないその天上へ行ったのかぼんやりして見分けられませんでした。ジョバンニはああと深く息しました。「カムパネルラ、また僕たち二人きりになったねえ、どこまでもどこまでも一緒に行こう。僕はもう、あのさそりのようにほんとうにみんなの幸のためならば僕のからだなんか百ぺん灼いてもかまわない。」「うん。僕だってそうだ。」カムパネルラの眼にはきれいな涙がうかんでいました。

発表順	7		
エントリーNo	111	ニックネーム	さとはる
題名	香水紳士		
著者	大阪圭吉		

東京駅発午前八時二十五分の普通電車。
その片隅には十六歳の少女クルミさんとその母が乗っている。
それは国府津にあるおばと従妹の信子さんを訪ねるためであった。
クルミさんは母に内緒で買った贈り物、“香水”を手に目的地へと向かう。
そんな彼女の前の席へ一人の男性が腰かける。
男性は四十前後で妙に目つきの悪い洋服の紳士であった。

いま、この客車の中に、このように恐い紳士が乗っていることなぞ、誰も知らないのだ。あたしだけが知っている。このまま知らぬ顔をして、国府津こうづで降りてしまってもいいものだろうか？

——しかし、それかと云って、どうして、自分のような少女の身で、こんなにふるえているような臆病おくびようさで、このことを人に知らせることなぞ出来ようか？

遠く、松原の向うに、見覚えのある国府津の山が見えだした。

「そうだ、もう、そろそろ荷物を下して置かなければならない」

急に我に返ると、クルミさんは、思い切って、静かに立ちあがった。手足がガタガタふるえている。まるで夢の中のしぐさのように、中々網棚あみだなの風呂敷包ふるしきづつみが下せない。

が、やがてとり下すことが出来た。

紳士は、相変らず居睡いねむっている。

と、この時、お祝いもののはいったその風呂敷包みを膝ひざの上へ置きながら、ふと、クルミさんの頭の中へ、とてつもない考えがひらめいた。すると、前よりもはげしくクルミさんの手足はふるえ出した。が、その眼は、急にいきいきと輝き出した。

しばらくクルミさんは、どうしようかと迷っているようであったが、窓の向うに国府津の海が見えだすと、いきなりクルミさんは、制服のポケットの中へ手をつっ込んだ。そして、真紅のリボンのかかった、小さな美しい木箱をとり出した。

それは、信子さんへのお祝いに、こっそり買求めて来た、あの香水だった。

クルミさんは、ものに憑つかれたような手つきで、ぶるぶる顫ふるえながら、その

美しいリボンをほどき、レッテルをはがして、木箱の蓋ふたをあけると、中から、円い、可愛い香水の瓶をとり出し、その栓の封を切った。

発表順	8		
エントリーNo	33	ニックネーム	玉置英紀
題名	銀河鉄道の夜		
著者	宮沢賢治		

父親の仕事のことで同級生にからかわれているジョバンニは、祭の日にも一人で星を眺めていた。ところが気がつくと、友人のカムパネルラと共に、銀河を走る不思議な列車に乗っていた。二人は窓の外から見える景色に感動していたが、急にカムパネルラはなにか思い詰めた顔を始める。彼はほんとうの幸せとはなんなのかと自らに問いかけていた。

「おっかさんは、ぼくをゆるしてくださるだろうか」

いきなり、カムパネルラが、思い切ったというように、少しどもりながら、せきこんで言いました。

ジョバンニは、

(ああ、そうだ、ぼくのおっかさんは、あの遠い一つのちりのように見える橙いろの三角標のあたりにいらっしゃって、いまぼくのことを考えているんだった)と思いながら、ぼんやりしてだまっていました。

「ぼくはおっかさんが、ほんとうに幸になるなら、どんなことでもする。けれども、いったいどんなことが、おっかさんのいちばんの幸なんだろう」カムパネルラは、なんだか、泣きだしたいのを、一生けん命こらえているようでした。

「きみのおっかさんは、なんにもひどいことないじゃないの」ジョバンニはびっくりして叫びました。

「ぼくわからない。けれども、誰だって、ほんとうにいいことをしたら、いちばん幸なんだねえ。だから、おっかさんは、ぼくをゆるしてくださると思う」

カムパネルラは、なにかほんとうに決心しているように見えました。

発表順	9		
エントリーNo	169	ニックネーム	あんず
題名	賢者の贈り物		
著者	O・ヘンリー		

貧しい夫婦がお互いのクリスマスプレゼントを選ぶ中、全財産が 1 ドル 87 セントしか無かった妻のデラは夫のジムに時計の鎖を買ってやるために自分の長くて美しい髪を売り、家に帰って夫の帰りを待つシーンです。

デラは、鏡にうつる自分の姿を、長い間、注意深く、ためつすがめつ見つめました。「わたしのことを殺しはしないだろうけれど」とデラは独り言をいいました。「ジムはわたしのことを見るなり、コニーアイランドのコーラスガールみたいだって言うわ。でもわたしに何ができるの —— ああ、ほんとうに1ドル87セントで何ができるっていうの？」

7時にはコーヒーの用意ができ、フライパンはストーブの上にのり、チョップを焼く準備ができました。

ジムは決して遅れることはありませんでした。デラは時計の鎖を手の中で二重に巻き、彼がいつも入ってくるドアの近くのテーブルの隅に座りました。やがて、ジムがはじめの階段を上ってくる足音が聞こえると、デラは一瞬顔が青ざめました。デラは毎日のちょっとしたことでも小さな祈りを静かに唱える習慣がありました。が、このときは「神さま。どうかジムがわたしのことを今でもかわいいと思ってくれますように」とささやきました。

発表順	10		
エントリーNo	34	ニックネーム	西未有
題名	銀河鉄道の夜		
著者	宮沢賢治		

主人公のジョバンニは父のことで同級生にからかわれ、祭の日も一人で星を眺めていた。しかし、ふと気づくと電車に乗っており、そこで友達のカムパネルラと再会する。ジョバンニは鉄道の中で不思議な乗客達と出会い、自分だけが特別なキップを持っていることを知る。鷺の停留所で青年と姉弟と出会った二人は、「ほんとうのさいわい」について考え始める。

ジョバンニが言いました。

「僕もうあんな大きな暗の中だってこわくない。きっとみんなのほんとうのさいわいをさがしに行く。どこまでもどこまでも僕たちいっしょに進んで行こう」

「ああきつと行くよ。ああ、あすこの野原はなんてきれいだろう。みんな集まってるねえ。あすこがほんとうの天上なんだ。あつ、あすこにいるのはぼくのお母さんだよ」

カムパネルラはにわかに窓の遠くに見えるきれいな野原を指して叫びました。

ジョバンニもそっちを見ましたけれども、そこはぼんやり白くけむっているばかり、どうしてもカムパネルラが言ったように思われませんでした。

なんとも言えずさびしい気がして、ぼんやりそっちを見ていましたら、向こうの河岸に二本の電信ばしらが、ちょうど両方から腕を組んだように赤い腕木をつらねて立っていました。「カムパネルラ、僕たちいっしょに行こうねえ」ジョバンニがこう言いながらふりかえって見ましたら、そのいままでカムパネルラのすわっていた席に、もうカムパネルラの形は見え、ただ黒いびろうどばかりひかっていた。